

ちょっとアカデミックに生態観察を楽しもう 三保真崎海岸



Photo & Text : Takaji Ochi
Model : Yuna Zayasu
Special Thanks : Diver's Pro Iron , TUSA

富士山をバックに、桜色のエビを天日干し作業をする漁業関係者。空が澄んだ日には、こんな美しい情景を見ることができる

雄大な富士山を真正面に見ながらエントリーしていく静岡県の三保真崎海岸。

この地方の春や秋の風物詩は、桜エビ漁と、富士山を見降ろす海岸線一面に広がる桜色の絨毯。これすべて乾燥中の桜エビだ。

天気の良い日にはそんな伝統的な風景を見学に行きがてら、ダイビングも楽しんでみるのも悪くはない。

多くの釣り客たちが、糸を垂らすビーチへとエントリーするのはちょっと不思議な感じもするのだが、

その海中もまた、独特な生態系を観察できる一風変わった海中景観を楽しむことができる。

決して美しいとは言えないが、シルト（砂泥地）に生きる生物たちとの出会いは、僕に多くの感動を与えてくれた。



清水港の港口であり、駿河湾へと続くその分岐点となる三保真崎海岸沖に防波堤が設置されていて、僕たちはその沖堤の東側を中心にダイビングを行った。ここが三保のメインダイビングスポットだ。

天気の良い日には目の前に雄大な富士山を見ながらエントリーしていく。周囲には、何人も釣りが釣りを垂らしている。しかし、ある程度暗黙のルールが出来上がっているのか、釣り人の多くは沖堤の西側に集中している。

日本平から湾口を見渡すと、その真崎海岸とダイビングスポットの沖堤が一望できる。

自分にとっては、2年振りに潜る本州の海。2年前に潜ったポイントもこの三保だった。つまりここ数年、僕は本州の海は三保で、しかもダイバーズプロ・アイアンの鉄多加志さんのガイドでしか潜ったことが無いのだ。個人的には久しぶりというだけでも、見慣れない魚たちのオンパレードだったのだけど、正直一体何がレアで何がレアでないかも皆目見当がつかない。南の暖かい海を取材するのは違う、戸惑いと好奇心に数日間悩まされ続けた。

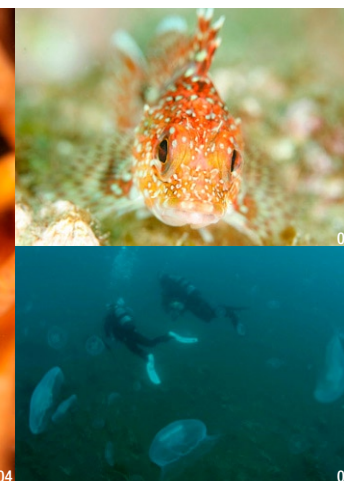
(鉄さんは、全く知識の無い自分に、呆れているかもしれない) そういう思いも無いわけではなかった。しかし、そんな表情を鉄さんが見せることは一度も無かった。それどころか、小学生がするような僕の質問にも、しっかりと答えてくれた。

それは、鉄さんが東海大学の海洋学部で学生たち相手に教鞭を振っている講師だからということもあるかもしれないが、やはり「人間性」。実は僕と鉄さんは同じ年なのだけど、その誠実で実直な人間性、そして当然のことながら、海の知識の豊富さから、どうしても同世代というよりは、「先生」的な気持ちで対応してしまう。

それが悪いというわけではなくて、僕にとってはとても素直に話が聞けて、とても気持ちいいのである。何かを「学び」たぐさせてくれる、豊富な知識と、そんな寛大な人間性に、僕はとても敬意を表している。多分、鉄さんがいなかったら、僕は三保という海には、一生出会っていなかったかもしれない。



三保の海を愛するガイドとの出会いが、三保の海との出会いだった



- 01/日本平から、ダイビングポイントの三保真崎海岸を一望する。バックには富士山が見える
- 02/ダイバーズ・プロ、アイアンの鉄多加志さん。最近では、リブリーザーを使って、頻繁に生態観察を行っている
- 03/シルトの海中、「お花畑」と呼ばれるポイントには、カラフルなキサゴが群生している
- 04/三保の人気物、オキゴンベ
- 05/僕にとっては、キサゴですら物珍しい
- 06/水クラゲが浮遊する、不思議な海中景観

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring

取材中、水温が一気に上昇し、17度台になった日があった。その日の海中は、多くの生物たちの求愛活動が頻繁に見られた。「三保では、一般的に18度が、生物たちがそういう求愛活動に入っていくボーダーラインだと思うんです。でも、今回は17度までしか上がってないけど、一概に18度というのではなくて、水温の上げ幅との影響もあるのかもしれないですね。上げ幅がかなり大きかった。それが刺激になって、今回は取材中に色々な生態シーンを見ることができたんじゃないかと思います」と鉄さん。

長くこの海を潜って、データを蓄積しているからこそ、このような仮説を立てることが可能なわけだ。「となると、ラッキーだったわけですか?」との質問に「ラッキーだったと思いますよ」という返事。鉄さんから、ネガティブな気持ちになるような回答は聞いた記憶が無い。

じゃあ、今回いったいどんな生態観察ができたのかと言えば、一番面白かったのが、トビヌメリの求愛行動と放精放卵シーン。水深10m～5mほどのエントリー口のスロープでこの活動を多くのトビヌメリがやっていたので、ダイビングの最後に安全停止をしながら観察することができた。

「トビヌメリの産卵は、長ければ4月末の大潮から、10月頭の大潮くらいまで見ることができます」。具体的には、大潮からの下りの数日間が一番頻繁に行われるタイミングなのだとか。

海底を這うように泳ぐトビヌメリが、自分の縄張り中で、産卵のためのペアを見つけると、体の大きなオスが小さなメスを胸鰭の上にそっと抱き抱えるようにして、2匹でゆっくりと上昇を始める。撮影は、ペアが3m以上上がってから開始しなければ途中で嫌がってやめてしまうことも多いのだそう。今回、1度目はそのことが分からずに、少し焦って撮影体勢に入ってしまった。

「滞空時間も長いから、観察しやすいので、もう少し待ってから撮影にトライしてみてください」。鉄さんのアドバイスを受けてから、どうにかペアで上昇しているシーンを抑えることができた。産卵時のネズボ系のペアリングの仕草は、見ていてとても微笑ましい。できれば次回は放精放卵の決定的瞬間を撮影してみたい。

日本の海では多くの場合、地元漁協などの許可を得て、制限された時間帯にしか潜れない場合が多い。しかし、三保では24時間、潜れない時間帯が無い。これは、夕刻時や早朝、あるいは真夜に行われることの多い珍しい生態観察をする上では、最高の条件と言える。

「伊豆でも多分、同じようにリミット無しで潜りたいと思っているガイドは多いと思います。でも、色々な縛りがあって、それができない。でも三保であれば、リクエストがあれば、潜りたいときに、観察したい生態を、どんなときにも見せてあげることが可能なんです」。だから、三保ハマる人は、他の海ではできない、その人のリクエストに応じてくれる海であることを気に入ってレポートしてきてくれるのだそう。

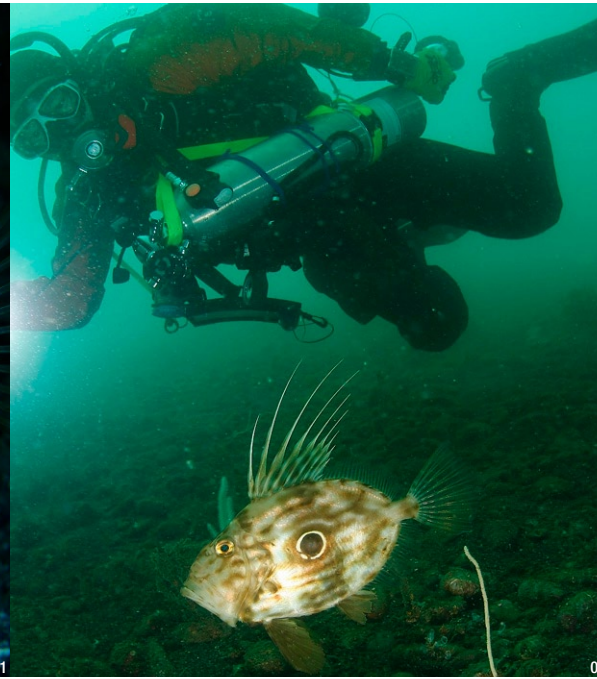
生態観察がしやすい海



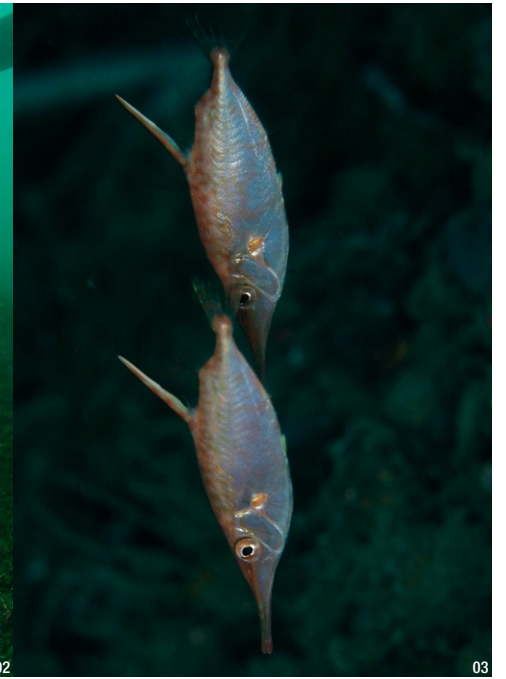
- 01/ 放精放卵のために、雌雄一緒に浮上するトビヌメリ
- 02/ オス(右)の求愛を受け入れたトビヌメリのメス
- 03/ 富士山をバックにエキジット。生態観察の話題に花が咲く



01



02



03

季節によって見れるものが違う



04



05

01/取材期間中、何度か目にしたマトウダイ。これも自分にはかなりレアな魚
02/撮影しやすいように、上手くマトウダイを誘導してくれ鉄さん

03/サギフエのペアも見かけた。多分僕は初めて目にした魚だ
04/水深5mで見つけたサゴタツ

05/マツカサウオも小さかったけど、夏に向けてどんどんと成長していくそうだし
06/個体数がやたら多かったハオコゼ

今回トビヌメリだけでなく、他にも多くの生物の求愛活動などを見るのができた。ハオコゼやキュウセンのオス同士がケンカしていたり、トラギスやコウライトラギスがメスのところに頻りにアプローチしていたり、ヒフキヨウジのペアが絡んでいたり。

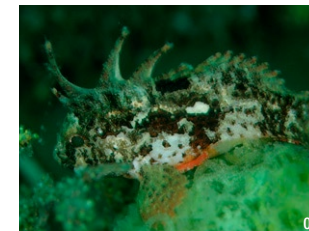
その他期間限定で見られる生物にも遭遇した。サギフエは、もともと深い場所にいる魚だが、「3月、4月頃になると、おそらく産卵のために、浅い場所へ上がってくる。多いときには30匹くらいの群れになる」のだそうだ。

マトウダイも、三保では珍しい魚ではないらしい。「多いときには、1ダイブで5個体見たこともあります。でも、ベストは冬の時期。これからは、500円玉くらいの幼魚が姿を見せてくれるようになります」と鉄さん。

「この日見たマツカサウオは、まだまだかわいい若魚。これも小さいのは冬の時期で、これからはどんどん大きくなっていきます」。

「シロアザミヤギの中に隠れているヨソギはやギの白さに合わせて擬態しているけど、あそこから離れると茶色っぽくなるよ」。「クロエリギンボやベラギンボは、そろそろ繁殖期に入り、オス同士が、ヒレ全開にして噛み合うシーンが見られるようになります。サルのマウンティングに似た行動を取ることもあって、面白いですよ」。

などなど、きっと三保や伊豆に潜っているダイバーにとっては、当然の知識なのかもしれないけれど、僕は今、正直ギナーダイバーのような気持ちで鉄さんの話を感心しながら聞いていた。



06

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring



01

01/ 沖堤の下に群れるサクラダイのメス
02/ カラフルな色どりのキサンゴ



03

03/ 三保では普通種のベニキヌツツミ。カラーバリエーションも豊富
04/ こちらもシロオビコダマウサギの一種

シルトの中の華とウサギたち



02



04

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring

三保のシルト状の海中は、モノトーンの影響が強い。しかし、そんな中にも、目を見張るような、華やかな生物たちが息づいている。

当然のことながら、鉄さんもそのことは十分に承知していて、色づけのために、撮影でまず最初に向かったのは、この海で人気のサクラダイやアカオビハナダイが群れる沖堤のテラボツドのスロープ。

以前にも見てはいるのだけど、やはりこの海のアカオビハナダイは、僕が見慣れたタイやフィリピンなどの個体と比べても、かなりでかい。それに、ここでは浅いと10数メートルで見ることができる。

サクラダイも伊豆だと25mくらいから見られるものが、三保だと20m付近で群れている。サクラダイは、海外の海では一度も見たことがなく、僕にとっては、アカオビハナダイよりも珍しい魚だ。

「秋(9月、10月、ぎりぎり11月)になると、集団でベアリングしてこのエリア一面で産卵活動を行っていて、それは壮観ですよ」と鉄さん。

そして、鉄さんが今、三保の海でダイバーに注目して欲しいのが、外套膜が美しいウミウサギガイの仲間たち。「え?貝?」と思うかもしれないが、「ウミウサギガイの仲間、和名が付いているものが、約60種類。そのうち、25~6種類、ほぼ半分近くが、この三保で見ることができるんです」。



シルトの中の華とウサギたち



- 01/ 今日富士山を仰ぎ見ながら、真崎海岸にエントリーしていく
- 02/ 他よりも浅い水深で見られるサクラダイのオス
- 03/ アカオビハナダイのサイズが大きい印象を受ける
- 04/ オスに比べて小さいアカオビハナダイのメス
- 05/ ツリフネキヌヅツミの個体数も多い

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring





01



03



04



05



06



02



07



08



09

シルトの中の華とウサギたち

三保の海には、ウミウサギガイのホスト(宿主)となるヤギヤトサカが多い。それが、シルトの中の華やかな「お花畑」として目を引く。着底して、周囲のヤギヤトサカを観察していると、あちこちにウミウサギガイの仲間たちが生息していることに気づくだろう。

通常のダイビングサイトでは、せいぜい2~3種類を見せてもらう程度だから、撮ろうかどうか迷うときもある。しかし、20

種類以上もいるのであれば、全種類の写真をコレクトしてみたくもなってくる。

「ウミウサギガイの仲間、ハグルマケボリはCrenovolva hirohitoと、昭和天皇の名前が学名につけられているんですよ。それも三保の海で見れます。それに名前は内緒ですけど、一つの貝殻が2万円くらいで取引されてるものもいるんですよ。でも撮ってもいいけど、取らないでね」と鉄さん。そういう箔付けのための知識も豊富な鉄さんの話を聞いていると、最初はあまり興味が無くても「え、じゃあちょっと見てみたい」と興味をそそられてしまう。

ウミウサギガイたちは、ホストを食べることで色が着くため、体色などが同化して、慣れるまでは、なかなか見つけにくい。「見つけるコツは?」と鉄さんに尋ねると、「カイよりも、ヤギヤトサカに産みつけられた卵の方がリング状になっていて、色も違うし見つけやすい。また、自分が着床する部分のポリブを食べちゃっているんで、そういう部分があるホストを調べれば、大抵どこかにいますよ」とのこと。

ウサギガイたちにマクロレンズを向ける。周辺環境から切り取られたファインダーの中には、陸でカラフルな花を撮影したような、華やかで色彩の美しい世界が広がっている。今回は種類を集めるのに、必至で、落ち着いて撮影することができなかった。これだけ多くの種類があるのであれば、次回はこのウミウサギガイをテーマに、もっと潜りこみ、撮影してみるのも悪くは無いと感じた。

ちなみに、鉄さんはアメブロで「真崎定点観測」(<http://ameblo.jp/g-iron/>)というブログを書いていて、貝類を含む、三保で見られる多くの魚たちの情報を詳しく見ることができる。三保に潜りに行くことを決めたと、あるいは潜り終えてからの参考にしてもらいたい。

アカデミックに魚の生態を知り、観察するダイビングは、「知的な好奇心を次のステップに押し上げてくれる」と鉄さんは話す。確かに、三保はそんなアカデミックなダイビングと、豊富な知識を持つ鉄さんと潜るダイビングスタイルが、とてもマッチしていると感じた。

01/形がかっこいい、ツリフネキヌヅツミ

06/アズマケボリ

02/アズマケボリ

07/ビードロマメヒガイ

03/昭和天皇のお名前が学名になっている、ハグルマケボリ

08/コボレバケボリ

04/ベニキヌヅツミ

09/ライトを当てて、ウミウサギガイを観察する

05/トラフケボリ

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring





01

01/ダイビング後のログ付けでの、かなりマニアックな質問にもスラスラと答える鉄さん

02/ランチを食べに、東海大学海洋学部の学食へ

03/エントリー前、真崎海岸の駐車場でも魚の話で盛り上がる

04/今回残念だったのは、透明度が悪かったこと



03



04

今回モデルとして同行してもらったのは、座安佑奈さんは京都大学理学研究科生物科学科動物学教室海洋生物学講座修士課程2年生で、日本のサンゴ、特にオトゲサンゴ科の分類の研究を行っているという変わり種。そんな彼女に、三保で潜った印象を語ってもらった。

モデルインプレッション

座安 佑奈さん

京都大学理学研究科生物科学科
動物学教室海洋生物学講座
修士課程2年生

潜ってみるまでは三保「シルトの海」と聞いて、私が持っていたイメージカラーは灰色。正直なところドライスーツでシルトを巻き上げずにうまく潜れるかとか、皆で見ているハゼを引っ込めてしまわないかと不安に思っていました。でも実際に潜ってみた印象は全く逆で、ピンク（サクラダイやアカオビハナダイ）、黄色（キササンゴやウミウサギガイの仲間）、アニメの1シーンのように大量のミズクラゲが漂って、流れもなく潜りやすくて優しい海でした。ウミウシ達も他で見ないほど太っていて、魚も不思議に逃げなくて海の豊かさを感じました。エキジットでは海岸が丸い砂利のため、重い器材を背負って濡れた岩で滑る心配もなく、ザクザク歩けるのも女性やカメラを持っていく人に嬉しいポイントですね。

生き物ではウミウサギの仲間が印象的でした。私は南紀白浜にある実験所の学生ですが、そこの大先輩の故山本虎夫先生が和名をつけたトラフケボリガイは美しく、以前から見てみたいと思っていたので今回初めて見ることができて嬉しかったです。他にも貝のくせにドラゴンフルーツのように派手なものや上手にヤギに擬態しているものなど、1ダイブ中に次から次へと色んな形、色の貝がいて宝探しのような感覚でした。

そしてガイドして頂いた鉄さん!多くの人が愛犬の気持ちなら分かると思いますが、そんな風に海の生き物の生態をよくご存知で、とても内容の濃いダイビングをすることができました。魚も貝も餌を獲り、力比べをしたり恋をしったり子孫を残したりしています。当たり前の事だけど普段はあまり気に留めていなかった

のが、求愛や生態を教えて頂き注目してみると、とても面白かったです。次の季節もまた同じ生物の、違う行動を見に来たいと思えたり、ただのヒトデと思っていたのがよく知ることによって忘れられない生物になったり。言葉で表現するのは難しいけれど、陸からちょっとの間やってきた通りすがりのダイバーではなく、海の住人の仲間入りをしたような新しい感覚で今回潜ることができて、それがとても心地よいスタイルでした。

私は今回憧れのWEB-LUEに初参戦できて、富士山を真正面にエントリーし、潜った後の空腹を桜えびの揚げたてサクサクのかき揚げ丼で満たせるだけでも十分幸せだったのですが、想像以上に豊かで奥深い三保の海を経験してさらにダイビングの面白さにはまってしまう。

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring





TUSA 新コンピューターで潜る三保

01/手前が新コンピューターのIQ-850

02/エントリー前に、新たに使用するコンピューターのチェックをする二人

03/12コンパートメントに分かれているバググラフは、海中でも見やすい

今回の取材では、TUSA から今夏発売の DC-SAPIENCE II IQ-850 を使用してダイビングを行った。IQ-850 は、体内に蓄積される残留窒素を 12 本のバググラフで表示している。これは、体内組織によって、窒素の溜まり具合が違うことをビジュアル化することで、より減圧潜水に対しての注意を促す効果を持っている。

ダイビングを行っている上で、意外と危険なのが、エアークラスターが長持ちして無減圧潜水時間が長く表示される水深 15m ~ 19m 辺りに停滞する反復箱型潜水。窒素の排出が遅い組織は、急浮上や潜水終了後の高所移動などで減圧症を引き起こす可能性が高まる。

今回の撮影フィールドである三保の海底は、約 20m 付近でフラットになる。その海中を移動しながら撮影を行うわけで、形としては、反復箱型潜水の状態になることが多い。そのときに、視覚的に窒素の残留量が認識し易い同コンピューターで潜ってみた感想を、ガイドの鉄さんにコメントしてもらった。

三保真崎海岸
Web-lue 2009. Spring

僕も、前から減圧症に関する「速い組織、遅い組織」の話は、気にしていました。アイアンが早くからエンリッチドエアークラスを導入したり、高濃度のナイトロックスで加速減圧をしたりしていたのは、単に在底時間を長くするという事ではなく、窒素の物理的な吸収量を減らしたり、排出速度を速める事で、リスクの軽減を図ることを目的としてのことです。三保は、通常のガイドで行ける最大深度は26mくらいで、他のダイブサイトと比べると、比較的浅い事が一つのウリなんですけど、実はここに「遅い組織」のリスクが隠されていた事は、数年前まで気が付きませんでした。幸い、そう言った無知による減圧障害は発生しませんでした。安全管理面でそういった医学的配慮が足りなかった事は否めませんね。もちろん、何も考えていな

かった訳ではなく以前は14.8MPまでしかチャージしていないタンクしか貸し出していなかったの、ある意味で結果論ですけど回避ができていたのではないかと考えています。

今回、IQ-850を3日間使わせていただいて、感じた率直な感想を述べてみます。前モデルのIQ-800で感心した大型ディスプレイ、パイプレーション機能は継続されていて安心しました。そして、今回から2パターンのナイトロックス設定が可能になったことや、なんとと言っても一番のポイントは、12のコンパートメントをバーグラフ化した表示です。これによって、今まで一元化されていた各組織の窒素量の増減が「可視化」されました。単に細分化しただけに思えますけど、この視覚的効果は絶大です。つまりバーが左右のどちらかに片寄っていれば、このダイビング

で溶け込んだ窒素が「遅い組織」あるいは「速い組織」のものなのが目瞭然なのです。だからと言って、直接的に減圧症が出にくくなったり、窒素が溜まりにくくなる訳ではありませんが(笑)これは、ダイブコンピュータを使って安全にダイビングをするためには、この後どうしたら良いのか?を、示唆してくれる素晴らしいグラフだと思いました。詳細に言及すると、TUSAさんのサイト「減圧症の予防法を知ろう」の丸写しになってしまいますので、感覚的な話しにとどめますが、従来の製品だとダイコンに表示されている無減圧潜水時間は、まるで安全に潜れるのはあと何分!みたいな、いわゆるカウンタダウン的に捉えている人が多いと思います。そして、減圧停止時間は...ペナルティ(笑)みたいに考えている人が大半じゃないのでしょうか?バーグラフに関して言えば、中間に黄色を配しているダイコンもありますが、緑(セーフティ)から赤(リスク)のゾーンにいきなり行くような感覚があるので、ここは係数化するかして段階的に安全な範囲を超えようとしているのだ、と認識させた方が効果的だと思っていました。それが、このIQ-850では見事に表現されていると思いました。もちろん、使い方を知らなければ意味がありませんが、ダイコンはこうやって使うと本来のダイビングコンピュータとしての用を成すのですよ、と教えてくれるのがこの製品の最大の特徴だと感じました。

この取材中は、僕だけ高濃度のナイトロックスをベールアウトのタンクに入れて携帯していたので、MIX2を50%の設定にして浮上の際、水深18mからはベールアウトから呼吸していました。もちろん、減圧時間も少ないですし、僕の体内に溶け込んだ窒素量は、コンピュータが示す数値に満たないようなレベルだったと思います。MIX2を使った浮上は、その時の減圧時



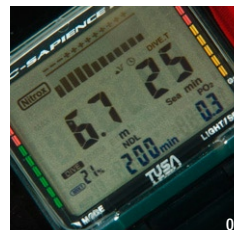
03

TUSA 新コンピューターで潜る三保

鉄多加志さん
ダイブスプロ・アイアン
オーナーガイド

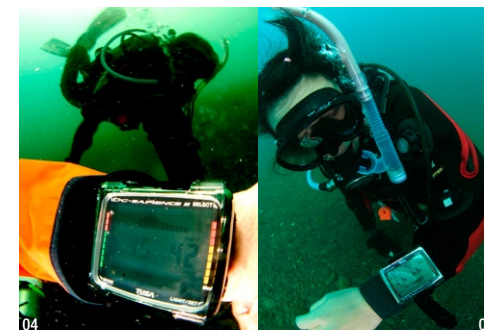


01



02

- 01/海底がフラットな三保の海には最適なコンピューターだ
- 02/安全停止中に撮影した画面。どの組織に窒素が多く溶け込んでいるかが一目瞭然
- 03/IQ-850の使用感について、話合う二人
- 04/バーグラフの変化を見るのも面白い
- 05/モデルの座安さんも気に入っていたようだ



04

05

三保真崎海岸
Web-lue 2009. Spring



「ゲストに、絶対こんな見れないだろうって言われたものを見せれたときは、たまらないですね。自分だけ写真撮ってるときよりも、わー、こんなの見れるとは思わなかったよ〜とゲストに言われることに快感を覚えます」。鉄さんの場合、それが、たまたま見せれたものではなく、緻密なデータの蓄積と、長年の経験から来ているのだから、その思いもひとしおだろう。

データの蓄積と経験から、鉄さんの口をついて出てくる、魚に関する話術。これが三保の海にゲストを引きこませることになる、大きなファクターであることは言うまでもないことだ。

ゲストは一度に4人までと少人数制なのは、三保の海が大勢で潜って楽しめる海ではないというだけでなく、鉄さん自身のこだわりでもある。(つとと言うか、単に車が5人乗りだからというウワサも

←(笑)



01/ダイビングポイントに向かう前に、シップで談笑する鉄さんとモデルの座安さん

02/店内には、鉄さんや、ゲストの人が撮影した三保の写真がプリントして置いてある

03/アイアンの外観

04/アイアのスタッフ

ダイビングショップ

ダイバーズ プロ・アイアン

1978年にできた老舗のダイビングショップ&サービス。31年の間に認定したダイバーの数は約6,000人。三保の海だけで10,000時間を超える潜水をしている。近年は、職業潜水士の育成や川や湖などの内水面のガイドにも力を入れているので、興味のある人はスタッフまでどうぞ。

オーナーガイドの鉄さんは、リクエストがあれば、早朝でもナイト3本(笑)でも応じてしまうネジの外れっぷりは、自他ともに認める「ダイビング馬鹿」。しかし、最近では「親バカ」っぷりの方が勝っているとゲストに冷やかされている。東海大学海洋学部の近くなので、関係者は思い出したらたずねて下さい。



04



02



03

プレゼント



今回、ダイバーズ プロ・アイアンさんから、プレゼントを預かってきています。Tシャツ3種類です。残念ながら女性サイズがなく、男性のLサイズのみとなります。ご希望の方は多い合わせページより、アイアンのTシャツ希望と記載して、ご連絡ください。



05



06

05/三保と言ったら桜エビ、桜エビと言えば「鐘庵」清水三保総本店の桜エビ丼!絶対一度は食べた方がいいほどおすすめ味の

06/生しらすも美味しかった、三富直(みふね)の桜エビそば

三保真崎海岸

Web-lue 2009. Spring

